

知覚に影響する社会・文化的要因

大川けい子

弘前大学 農学生命科学部

神経心理学者の山鳥（2008年）によると、「三次元性を持つ対象を知覚できるのは、深層のあいまいな経験（山鳥のいう感情）を明瞭な外界知覚経験（山鳥のいう知覚心像）へと作り上げていくからであって、感覚器経由の知覚情報だけで外界知覚が成立するのではない」という。つまり、突出した「知覚心像」は、三次元の対象を知覚し、二次元の画面に表現しようとする画家の視点、および制作された絵画作品を見る鑑賞者の視点を考えてみると、より鮮明に見えてくる。

具体的には、まず自然空間を「線遠近法」によって画面に再現することに成功したルネッサンス絵画とキュビズムの「自由な造形」によって表現した画家の視点について、それらを代表する絵が描かれた時代と社会の特質を概説したうえで、比較的簡単に取り扱える鑑賞者の視点に関してアンケート調査した結果から、私達の知覚は個人のなかに閉じられたものではなく社会・文化的要因が影響している可能性を議論する。